

富士のさと ボランティア養成研修

令和2年6月27日(土)、6月28日(日) 0泊2日

○目的

青少年の体験活動を支援するボランティアに求められる知識・技能を習得するとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

○参加者

自然体験活動やボランティア活動に興味・関心のある
高校生、大学生、社会人

計45名(内訳:男性23名,女性22名)

(高校生:21名,大学生・大学院生:22名,社会人2名)



○事業の内容

(1)「国立中央青少年交流の家とは」 当所次長 桑山宗大

青少年教育施設の成り立ちや役割について学び、当所で実施している事業や代表的なプログラムについて紹介した。またグループでの活動を体験し、体験活動がどのようなものかを実感する機会とした。



(2)「アイスブレイクでお互いを知ろう」

当所企画運営ボランティア

本研修の企画運営ボランティアがアイスブレイクゲームを行い心と身体の緊張をほぐした。活動後には意図説明を行うことで、アイスブレイクの効果について学び、参加者からは「すぐに名前と顔を覚えることができた」という感想も聞かれた。



(3)「子どもたちの“いま”を知る」

講師:常葉大学短期大学部 准教授 遠藤知里 氏

個人で自分の経歴を振り返り、それをグループで共有した。子どもたちが気持ちを出すことを肯定することが、子ども理解につながることで、また、“いま”を生きる子どもたちに対して、“いま”だからこそできる肯定的な支援が必要であることを学んだ。



(4)「野外炊事のいろは」 当所企画指導専門職 長谷川賢

実際に参加者を指導する際に重要となる安全管理を、過去の事例を踏まえて学ぶ機会とした。また野外炊事の進め方と安全管理の方法について基本的な技術を身につける機会とした。



(5)「キャンプで実際に起きる傷病の応急処置」

講師:フジ虎ノ門整形外科病院 看護師主任 杉浦信志 氏

実際に起こりうる傷病に対する応急処置を、実演を通して学んだ。応急処置の方法は時代とともに変化すること、実際にAEDや救急セットに触れることで正しい知識を身につけることができた。



(6)「ボランティア活動の意義と心構え」

当所ボランティアコーディネーター 長谷川賢

ボランティア活動をはじめ、様々な場面で子どもたちの活動を支えるための“指導者の視点”を学んだ。また、参加者の安全を確保すること、参加者ファーストであることなどを、ハンドブックを活用して実感した。



(7)「ボランティア活動の実際を知る」

当所企画運営ボランティア

教育事業で活躍しているボランティアが実体験を語りながら事業紹介を行った。事業ごとにブースをつくり、ワールドカフェ形式で参加者との質疑応答を通して事業の概要や経験をより深く伝えることができた。



《参加者の感想》

- ・年齢やバックグラウンドも違う人たちと共に生活したことで、色々な価値観や考え方に触れられて本当に充実していた。
- ・「一歩踏み出してみる」ということを、今回の色々な場面で見聞きして、それが本当に大切だと感じました。これからボランティアとして参加できる事業に参加してみたいです。
- ・法人ボランティアに出会えて本当に良かったです。昨年参加した団体とはまた違う内容で、とても興味深いものばかりでした。
- ・ボランティアをやってみたいと思う気持ちが大きく膨らみました。ボランティアを通して、自分を変えたいと強く思いました。今度は自分から活動したいと思いました。
- ・新しい出会い、学び、体験があり、とても有意義な2日間でした。次は“指導者”として再び中央に来て社会に貢献できる人になりたいです。
- ・自分の目標だった「ボランティアについての考えを深める」を達成できたので良かったです。
- ・ボランティア同士、職員間の仲の良さが伝わってきてよかったです。ボランティアに対する具体的なイメージを持つことができました。

《成果と課題》

- 例年、大学生の参加者が多い研修だが、今年度も高校生の参加が非常に多く、ボランティアへの興味関心が高校生の年代でも高まっていることが感じられた。
- 企画運営の一部を実際に活動しているボランティアスタッフに担ってもらうことで、活動の実際の声に参加者へ届けることができた。参加者からは「先輩ボランティアのようになりたい」「夏の事業など、中央の活動に関わりたい」などの声があり、ボランティアスタッフがロールモデルとなっている様子も窺えた。
- 事業の説明をワールドカフェ形式で実施することで、事業に深くかかわったボランティアから想いや事業の体験談を、質疑応答を踏まえながら伝えることができた。
- ボランティアスタッフの多くが昨年度の参加者であったことで、昨年度の内容を踏まえての企画運営を意識し、準備を進めることができた。
- 高校生の応募が多かったことを考えると、宿泊前提ではなく今回のような日帰り形式（希望者は宿泊可能）を検討する必要性がある。
- 今年度は新型コロナウイルス感染症で日程変更や三密対策を考えながらの実施となった。イレギュラーな状況で、どう判断し行動するか、今後も所全体として考えていかなくてはならないと感じた。